
ドラゴンズクロニクル

天照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンズクロニクル

【Nコード】

N9348Z

【作者名】

天照

【あらすじ】

ドラゴン それは地上で最大にして最強の生物。火を吐き毒を吐き、この世界の頂点に君臨する存在。しかし、そのドラゴンに復讐を誓う者がいた。名はキリヤ。黒いドラゴンにすべてを奪われ、絶望した男。

始まりの日

竜暦1600年 1月17日

「嘘……だろ……」

キリヤは、ついさっきまで村“だった”廃墟を前に、立ち尽くしていた。

つい先程まで確かにこの場所は、キリヤが生まれ育った『アルト村』だった。決して豊かな村ではなかったが、村人は優しい人ばかりで、とてもどかな村だった。小さくても人が少なくても、村人みんなで協力して必死に生計せいけいを立てている、そんなこの村がキリヤにとっての誇りだった。

しかし、今はかつての面影もなく見るも無残むざんな瓦礫がれきくずとなっていた。

「何があつたんだ……」

つい2時間ほど前、キリヤは母親に夕飯の買出しかいだを頼まれ、徒歩で隣町まで出かけていた。

隣町は村から30分程度の場所であり、道中にモンスターも湧かないため、10歳だったキリヤにも夕飯の買出し程度は可能だった。

1時間程度で買出しは終り、キリヤは帰り道を歩いていた。キリヤは買い物籠かごの中の不思議な形の材料を見て、これで何作るのかなあ、などと考えていた。

具体的には、ぬめぬめした緑色のイソギンチャクのような生物や、頭が二つある魚、食べたら一発で死ぬそうな紫色のキノコ。さまざままなジャンルの食材があつたが全体的に気色悪く、直視していると吐き気がしてきたのですぐさま物体Xたちから目を逸そらした。

その時、ものすごい爆音とともにアルト村の方角から煙が上がった。そして、黒い“何か”がアルト村から飛び立ち、遙か彼方へと飛んでいくのが見えた。

あれは……ドラゴン？ キリヤは興味本位でドラゴンに関する本を読んだことがあるが、本にはどこにも黒いドラゴンについては書かれはていなかった。

キリヤが全力で走って村に戻っている間にも、みんなの無事を祈る一方で、言い知れぬ胸騒ぎが無意識のうちに足を早くする。

村は地獄だった。

そこらじゅうに死体が転がっていた。それは知っている顔ぶればかりだった。

跡形もなく粉碎された家々。半ばから折られた時計塔。よく友達と遊んでいた広場も焦土しよどと化していた。

まだ10歳だったキリヤにとって、このあまりにも突然で絶望的な光景は精神的に耐えられるものではなかった。

地面に膝ひざから崩れ落ち、今にも逆流してきてしまいそうな胃物いぶつを口をふさいで必死に押さえ込む。

なぜだ、どうしてだ。キリヤはひたすら考えた。しかし、答えは見つからない。いや、ひとつだけ思い当てることがある。数分前この村に向かつて走っているときに見た、黒い“何か”。あいつだ、きっとあいつがやったんだ。薄れゆく意識の中でそれだけは分かった。しかしなぜこの村にそれが現れたのか。それこそ本当に答えは出なかった。

吐き気がおさまると自然と足が動いていた。目で見て分かるものと記憶を頼りに一心に歩き続けた。

そして、ようやく目的の場所に着いた。毎日ここで食べ、寝て、

笑った場所。泥だらけになって帰ってきたらいつも叱しかつてくれた。そして、いつも優しくしてくれた人がいる場所、我が家に。

しかし、その我が家も原型を留とどめてはいなかった。

「父さん……。母さん……。」

キリヤは朦朧もうちゆうとする意識の中で信じていた。両親は生きていると。キリヤはただがむしゃらに、家の一部だった瓦礫くずを掘り続けた。

絶対に生きている。なんとしても見つけ出す。諦めてたまるか。キリヤは心の中で何度も自分に言い聞かせた。

作業は1時間以上も続いた。瓦礫が予想以上に多く、常人、ましてや子供が出来る作業ではなかった。だが、キリヤは信じ続けた。掘って掘って掘りまくった。

キリヤはまだ子供だ。だからどれほど意識を強く保とうと体力には限界がある。手の皮は剥け、腕の筋肉は限界だった。

その時、瓦礫の奥に二つの人影が見えた。キリヤは最後の力を振り絞り最後の瓦礫を退どけた。

二人の安否を確認するためにキリヤは二人の首に手を当て脈が無かった。

二人は抱き合い、二度と覚めることのない深い眠りについていた。キリヤは、安らかに眠る二人の顔を見ていると溢あふれる涙が止まらなかった。

もう誰もいない。いつも一緒に遊んでいたあいつも。あの魚屋のおじさんも。そして、父さんも母さんも。死んだんだ。

そう認識した時、キリヤが今まで押さえ込んできた感情が爆発した。

「うわあああああああ！」

キリヤは空に叫んだ。最後まで両親のそばにいられなかった後悔。

そんな自分に対する怒り。そして、この村をこんなにした“あいつ”への怒り。そのすべての感情を乗せて叫んだ。
”そしてついに、キリヤの意識をこの世界に繋ぎとめていた、精神という名の紐ひもが切れた。視界がブラックアウトした。

* * *

竜暦1606年 2月10日

「うわあー！」

俺はベットから飛び起きた。首は汗でぐっしより濡れていて、しばらくは呼吸が荒いままだった。

今の夢を見るのももう何度目だろうか。6年前のあの日から何度も夢に出てくるあの光景。今でも網膜に焼き付いている。

俺はふらつく足で窓際に行き、カーテンを開けた。

「ッ」

真っ暗だった部屋の中に明るい朝の日差しが差し込んできた。

そつだ。俺は6年前のあの事件を忘れない。忘れてはならない。

俺があの時、何を奪われ、何に絶望したのか。そして、すべての憎しみををあいつにぶつけるまでは。

朝日を全身に浴びながら、キリヤは人知れずに決意した。

命の恩人

竜暦1600年 1月20日

俺があの時ぶっ倒れた後に目覚めた場所は、見知らぬ家のベッドの上だった。

「うう……」

まだ激しい頭痛がしていたが、キリヤはまだ鉛のように重いからだを持ち上げた。

「どこ、だ……どこ？」

辺りを見渡すと、そこはまったくキリヤには見覚えのない場所だった。

そこには本棚、たんす、キッチンテーブルなどの一般の家庭で見られるような物ばかりであったが、一際目立つものがひとつ。

それは、壁に掛けられていた。枠の部分には木材が使われており、中には紙が入っていた……まあ、要するに掛け軸だった。

だがキリヤは掛け軸という“物”に驚いたわけではない。その掛け軸に書かれている“文字”に驚いたのだ。

そこに書かれていたのは大胆かつシンプルな言葉だった。

『筋肉美』

「……………」
キリヤは心の中で呟いた、意味分からんと。

『筋肉美』なんていう言葉この世にあっただけ？ いや、ない。

ていうか断じて認めん。など考えていると、不思議とあんなに激しかった頭痛が消えていた。恐るべし筋肉パワー。

そこでキリヤは、ようやく今自分が何をしなければならぬかに気付いた。

一体ここはどこで、誰があのかで俺を見つけ、この家まで運んだのか、ということだった。ここでひたすら考えても答えは出そうにない。そう思いベッドから立とうとしたその時、部屋のドアが勢いよく開いた。

そこにいたのは 筋肉だった。

全長は1メートル90センチほどの巨体。赤い髭ひげと赤い髪。そして盛り上がった筋肉はそこいらのモンスターモンスターの比ではなかった。

“筋肉”と目が合った。俺は直感的に悟さとった。殺される、と。

「おお、目が覚めたか坊主！」

しかし、その“筋肉”が発した言葉は人間のそれとまったく変わらないものだった。

「3日も起きないから心配したではないか」

(3日? 俺はそんなに寝てたのか)

ということとは3日も寝込んでいる間、この筋肉赤髭達磨だるまさんがずつとキリヤの容態を見てくれていたということになる。

「どうだ、具合は？」

「まあ、少しは頭痛がするけど結構良くなりました」

「そうか、それは良かったなあ」

良かった、言葉が通じた。ってことはこれは人間なんだ、と少しだけ安堵あんぶする。

とりあえず礼はしなければ、と思いキリヤは頭を下げる。

「あ……あの、ありがとうございます」

するとその男は、顔に笑顔を浮かべ、「いいってことよ」と一言。男は椅子に座り、改まったように口を開いた。

「それにしても坊主、あそこで何が起きたんだ? ちとあそこの村の村長に用事があったんで、隣街まで出かけた帰りに行ってみりやあ、ものすごいことになっておったぞ」

それは今この男が一番疑問に思っていることだろう。キリヤは知

っていることを詳しく伝えたかったが、あの村で起こったことを思い出そうとすると口が思うように動かない。頭痛もひどくなる。

そんなキリヤの様子を見て男は「いや、無理はせんでいいんだぞ」と言ってくれたが、命を助けられたうえに3日も世話になったのだから、キリヤにはすべてをこの男に伝える義務がある。

「いえ、話せます」

キリヤは動かぬ口を必死に動かし、激しい頭痛に必死に耐え、あの村で一体何が起こったのかを全て男に話した。黒いドラゴンがあの村を襲ったこと。最愛の両親を含めた自分以外の全ての村人が殺されたこと。男は最後まで黙って聞いていた。

キリヤは話し終わると激しい頭痛と眩暈めまいに耐え切れず、またベッドに横になった。

「そうかあ、それは辛つらかったなあ」

男はキリヤに同情するかのように呟いた。

「はい、辛つらかったです。でもいくら悔やんでも仕方ないんです。

過去は戻って来ませんから」

「そうかあ、お前は強いなあ」

「いえ、人間いつか経験することを他人より早く経験しただけですよ」

口ではそう言っても動揺の色は隠せず、キリヤの声は震えていた。本当にお前は強いな、と男は心の中で呟いた。

しばらく横になっていると頭痛も消え、そういえばこの人の名前知らないなあ、と思いキリヤはとりあえず男の名前を聞くことにした。

「俺キリヤって言います。あなたの名前は？」

「俺あフィストだ」

フィスト、それがキリヤの命の恩人の名前だった。

「フィストさん、3つだけ質問していいですか？」

「“さん”なんて付けなくていい。で、質問って何だ？」

ええ年上の人呼び捨てで呼んだことねえ、などと思いつながらキリヤは話を続ける。

「えっと……じゃあ1つめ。ここに一人で住んでるんですか？」

そう、この家は一人で暮らすには大きすぎた。明らかに5人以上の家族でも広さには不自由なく暮らせるはずだ。しかし、キリヤは興味本位で聞いただけだったが、なぜだかフィストは悲しい顔をしていた。まるで宝物を失くした子供のように。

「まあ、一人暮らしだ」

そう言っているフィストの悲しそうな横顔を見たら、その質問を続けようとは思えなかった。なので次の質問に移ることにした。

「じ、じゃあ2つめ」

そう、ここからが本題。

「えっと……あの壁に掛かっているのは何ですか？」

そう言いながらキリヤは壁の掛け軸を指差す。フィストさんがここに一人暮らしならば、あれを書いたのもフィストさんだ。確かめなければ、あれが何なのか。

「掛け軸だが？」

フィストはその一言でキリヤを一蹴。

「いや、あの文字のことなんですけど……」

「筋肉美だ」

また一蹴。

「ああ、そうなんですか……じゃなくて！」

ここで食い下がるわけにはいかない。

「『筋肉美』って何ですか？」

「文字の通り、“筋肉”の“美”だ」

(だめだ、頭まで筋肉で出来ているこの人とまともに会話するのがこんなに難しいとは……)

「そうですか、ありがとうございます」

キリヤは、もうこれ以上聞いても無駄だと判断し最後の質問をすることにした。

「じゃあ、3つめ……何で半裸なんですか？」

そう、この男は家に帰ってきてからキリヤの話を聞き、現在に至るまでずっと半裸だったのだ。

「何でって……暑いからに決まっておるうが」

嘘だろ、今雪降ってるぞ。もしかしてこの人は感覚器官まで筋肉でできてんのか？ と、口には出さないが心の中でツツコミを入れるキリヤであった。

「よし、質問は終わったな。俺あまたちよつくら隣街まで用事があるんで出かけてくるが、お前は俺が帰ってくるまでは安静にしていた方がいい。そのベッドに横にでもなっておれ」

質問する前よりした後のほうが疑問が増えている気がするが、まだこの家について良いというのならお言葉に甘えとしよう。そしてキリヤはもう一度大きく頭を下げた。

「本当に、ありがとうございます」

フィストはこちらに顔を向けず、返事の代わりに手を振って家を出てった。

これがキリヤと、キリヤの命の恩人フィストとの出会いだった。

命の恩人（後書き）

まだ、書き始めたばかりです。なので気軽に感想、アドバイスしてくれるとありがたいです。

入門

竜暦1600年 1月27日

「ハア……ハア……何でこんなことになんだよ！」

キリヤは森を駆け抜けながら叫んでいた。

キリヤはなぜ走っているのか。それは1時間前のこと。

*

*

キリヤは1週間ほどフィスト宅に居候状態いこうじょうたいだった。

ずっと迷惑掛ければなしだし、いつかは出て行かなきゃなあ、とキリヤは思っていた。

そんなある日、キリヤはあることに気づいた。フィストがどこか出掛けて帰ってくる時は、いつも何かでかいモンスターのような物を肩に担いで帰ってくることに。

とりあえずキリヤは疑問に思ったので聞いてみた。

「あの……いつも何かでかいモンスターみたいなのを担いでますけど、どこで買ってるんですか？ そんなに大きい物」

するとフィストは平然とした顔で答えた。

「いや、モンスター“みたい”じゃなくて“本物”のモンスターだぞ。それに“買ってる”んじゃないねえ。“狩ってる”んだよ。こいつは今日の夕飯だ」

ええええええええええええ！？ とキリヤは心の中で叫んでしまった。キリヤは今まで、すぐそこにある街で買ってきてるやつだと思っていたが予想外。この男は狩っていた。

モンスターといえはあの強くて凶暴なやつだ。『出会ったらすぐ逃げる』が鉄則のモンスターを狩ってきた？ 確かにこの世界にはモンスターを狩ることを仕事としている人たちはいるらしい。しか

しそんな人たちも大抵は2〜5人程度のグループを作って狩りをする。なのに、この男は1人でモンスターを狩って来たのだ。それにこの人さっきなんて言った？ 今日夕飯？ 今日夕飯！？ 俺にあのグロテスクなモンスター食わせる気かよ！ ていうかこの人がああいうもん持って帰った日の飯は変な形してなかったか？ てことは何回も俺はあんなグロテスクなもん食ってたのかよ！ でもめっちゃうまかった！ 実は見た目によらず料理得意なのかよ！ キリヤは心の中でツッコみまくったが、心を落ち着かせるために1度大きく深呼吸をした。

「えつと……もしかして……素手で倒したんですか？」

素手で倒したとなればまたツッコまなければならぬ。

「いや〜、さすがの俺でも素手でモンスターは倒せんなあ」
良かった。

「でも、この武器は使ってる」

「武器？」

フィストが柵たなから取り出したのは腕の形をしている金属の腕型武器だった。だから要するに……。

「ほとんど素手じゃないですか！」

と、今度は反射的に口に出してツッコんでしまった。

だがフィストは真剣な顔だった。

「あのなあ坊主、そもそも武器を持ってるってことの意味がどういふことか分かってるか？」

「？ モンスターを倒すため……ですか？」

フィストは大きいため息をついた。

「そうだよなあ。まだ子供だし知らないのも無理はないか」
とブツブツ言っていたが改まった顔をしてこっちを見た。

「いいか、坊主」というフィストの先生めいた口調の言葉から話が始まった。

この世界には4種類の人間がいる。

まず1つめが『魔術師^{マジシャン}』の称号を持つ人間。読んで字の如く魔法使って戦う奴らだ。だが魔法つたつて数えきれねえほどあるから他人と同じ魔法は絶対に使えねえ。だから自分が使える魔法は全部自分だけの魔法だ。魔法を使うにはもちろん魔力は必要だから無限に発動できるモンじゃないが、魔力がないやつだつて鍛えれば魔力は生まれる。それに、魔力を持つてるやつも鍛えれば自分の最高魔力量を底上げ^{てあげる}できる。だがなあ、次のはそうはいかねえんだ。

2つめが『召喚師^{テイマー}』の称号を持つ人間。こいつらは召喚獣を召喚して戦う奴らだ。だが、こいつらは元から持つてる召喚師としての素質でなれるかなれないかが決まっちゃうから、鍛えてどうこうつて訳にやあいかん。だから、この世界で一番少ない人種の間人だ。

そして3つめが俺の持つてる『戦士^{ブレイカー}』の称号を持つ人間。こいつらは自分だけの武器を使ってモンスターと戦う。もつと言えばほとんど自分の体を使って戦うから、魔法を使って戦うマジシャンや自分のモンスターを召喚させて戦うテイマー達と比べて、動けるのは当たり前なんだ。まあ自慢するわけじゃないが俺も中々強いぞ？

んで最後が『民^{バル}』。こいつらは何も称号を持ってない人間のことだ。この世界の人口の5割以上の人間がこれだ。まあ命を懸けてモンスター狩つて金稼ぐより、普通に仕事して金稼いだほうがいいって思ってる奴らが大半らしいな。

この世界にはマジシャン、テイマー、ブレイカー、この3つの内2つの称号を持つてる奴らがいる。そいつらを“二重称号^{デュアル}”って言うんだがこの世界には十数人しかいないらしい。だがもつと例外な奴らがいてなあ、3つの称号全てを持つてる奴を“三重称号^{トリプル}”って言うてるんだが、まあこの世界で数人しかいない例外中の例外だ。

というのがこの世界の作りらしい。

キリヤは話を聞き終わつた瞬間に身を乗り出した。

「てことは、俺も強くなれるんですか!？」

強くなれば“あいつ”を倒せるかも知れない。キリヤはそのこ

とで頭がいつぱいだった。

「まあ、修行したら誰でも強くなれるぞ。多分」

なら修行して誰よりも強くなってやる。「あいつ」よりも。

「俺は……俺は強くなりたい。誰にも負けなくらい。「あいつ」に負けなくらい。だから……だから俺を弟子にしてください！」
戦い方を教えてくれる人はこの人しかいない。キリヤはそう思い
頭を下げた。

一方フィストは……。

「ガツハツハツハツハ、強くなりたいから弟子にしてください」

か！ そういうやつは嫌いじゃない。よかろう、弟子にしてやる！」

快く承諾してくれた。

「だがなあ、俺の修行はちときついぞ？」

「やってやりますよ！」

“あいつ”を倒すためならどんなに辛い修行だって耐えられる。そう
思っていた。そう思っていたのだが……。

*

*

現在キリヤは森の中を爆走しながら叫んでいた。

「辛いとは言われたけど……こりゃねえだろ」

「！」

1時間前に始まった修行はこういう内容だった。「この文字が書
かれた石を日暮れまでに取って来い。取って来れなかったら今日の
夕飯は無しだ！」と言って文字が書かれた石を崖からぶん投げた。
キリヤは心の中で、どこの仙人の修行だよ！ とツッコんでしまっ
たが、もう今は石を取って来るしかない。

「ああもう、ちくしょ

「！」

キリヤの叫びが静かな森に響いた。

入門（後書き）

大体世界観が決まってきました。どんどん細かい設定も増やしていくつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9348z/>

ドラゴンズクロニクル

2012年1月2日11時49分発行